

オンライン授業による日本語文章表現指導の開発

田 中 宏 幸

Development of Japanese Writing Instruction by Online Class

Hiroyuki TANAKA

日本文学科, 文学部,
安田女子大学

要 旨

「日本語文章表現演習」をオンライン授業として展開するにあたり、文書作成ソフトWORDを用いて200字限定作文を書き、全員の文章を読み、メッセージを贈り合うという活動を取り入れることにした。この活動においては、タイトルに工夫を凝らし、執筆前の構想に十分な時間をかけ、記述時には字数調整のために推敲を繰り返し、さらに書き上げた自分の作品には必ず反応がもらえるという「学習サイクル」が生まれることになる。この「学習サイクル」を継続することによって、学習者同士が学び合い、優秀作品が続出することとなった。作文に対する忌避感を軽減し、自分の文章に対する自己肯定感を高めるために取り入れた様々な工夫が功を奏したのである。この指導過程と成果を報告し、オンライン授業における「主体的で対話的な学び」を実現する手立てについて考察する。

キーワード：ICT活用、200字限定作文、相互批評、文章評価力、ポートフォリオ

1. は じ め に

公立高校で「国語表現」を10年間にわたって担当し、私立大学では通算18年間にわたって「日本語表現法」に関わる授業を受け持ってきた。毎年、学習者の実態に合わせて、題材の選択、課題の設定、および指導の方法に改善を加えてきたが、2020年度は新型コロナウイルス感染防止対策としてオンライン授業を実施することとなり、授業の内容も方法も大幅に修正・変更することが求められた。

オンライン授業といっても、Web会議システムではない。学生のWi-Fi環境や大学の回線容量を考慮しながらすぐに実施できるのは、Google Classroom（非同期型）を用いる方法であった。このシステムでは、資料と動画（10～15分程度に区切った数本の解説）の作成→資料と動画の配信→動画の視聴及びチャットによる質疑→課題の提出・受理→課題の点検・評価、という授業形態を採ることになる。これでは、お互いの顔も見えず、学習者間の対話も生まれにくい。豊かな自己表現を引き出すには、どのように信頼関係を築き、表現意欲を喚起するかという点から、

授業方法を構築し直す必要に迫られた。

この難題を解決するために取り入れたのは、「200字限定作文」（以下、「200字作文」と呼ぶ）である。指定テーマ（題材の範囲）のもと、条件として示された文章表現技術を生かしつつ、句読点も含め200字ちょうどにまとめていくのである。200字ならば、10～15分程度で書き上げることができ、30～40分程度で受講者全員（日本文学科37名、書道学科10名、児童教育学科2名、いずれも2年生、計49名）の文章に目を通すこともできる。さらに、相互評価の進め方に工夫を凝らせば、書き上げた作品に必ずメッセージがもらえるようにできる。かくて、「文話（文章表現に関する解説）を聞き、課題内容を理解する」→「構想を練る」→「200字作文を記述・入力する」→「作品集を読み、メッセージを贈り合う」→「もらったメッセージを読む」→「優秀作から表現技術を学ぶ」→「自分の文章を振り返る」→「次の課題を理解し、構想を練る」という学びのサイクルが確立した。この学びのサイクルは、学期後半の長文記述演習（800字程度）にも生かされ、集中度の高い学習が実現した。

本稿では、2020年4月20日から5週にわたって実施したオンライン授業、および同年6月1日から8週にわたって実施した対面授業（オンライン併用型）の実際を振り返り、前半部の短作文演習を中心に、日本語文章表現指導の成果と課題について考察する。

2. 授 業 計 画

2.1 授業の目標（一般目標）

目的や相手に応じて、達意の文章（自分の思いや考えを明らかにかつ穏やかに伝えることができる文章）が書けるようになる。

2.2 到達目標（観点別行動目標）

- ①言葉と表現の基礎知識を身に付けることができる。
- ②要点を分かりやすく説明することができる。
- ③出来事や様子を生き生きと描写することができる。
- ④短作文で習得した知識・技能を長作文（物語、書評、随筆）に生かすことができる。

2.3 テキスト

金子泰子著『国語教師が教える二百字作文練習』（溪水社、2018年11月刊）

本書は、上田女子短期大学、長野大学、早稲田大学等における筆者自身の文章表現指導の経験を踏まえて編集された大学生用「文章表現テキスト」である。前半部では200字作文による文章表現に取り組み、後半部では短文から長文へと発展させる構成となっている。題材への切り込み方や、習得したい表現技能についての解説がわかりやすく、大学生の作品例や題目例も数多く紹介されている。自学自習やオンライン授業において、学習の見通しを持たせるのにふさわしいテキストであると判断した。

2.4 授業計画（通常は90分×15回の授業を、2020年度は105分×13回に変更した。）

| 実施日 | 主な作文課題 | 文章表現技術 |
|-----------|--|--|
| (1) 4/21 | これまでの作文学習を振り返る | ①題を付ける。②段落に分ける。 |
| (2) 4/28 | 自己紹介（私の楽しみ・小さな自慢）を200字作文で書く | ③書き出し・書き結びに注意する。 |
| (3) 5/12 | 勧誘文・推薦文を書く（私のお気に入りをお勧めする）（200字作文） | ④文体（常体・敬体）を使い分ける。 |
| (4) 5/19 | 私の大好物（好きな味）を伝える（200字作文） | ⑤五感と客観的スケールを活用する。 ⑥言葉を的確に選ぶ。 |
| (5) 5/26 | 風景を描写する（200字作文） | ⑦叙述の順序（空間・時間）に方向性を持たせる。 ⑧文字・符号を使い分ける。 |
| (6) 6/9 | 人物を描写する（200字作文） | ⑨短文（一文一義）にする。 ⑩言葉の重複使用を避ける。 |
| (7) 6/16 | ある日の出来事を描く（200字作文） | ⑪首尾を照応させる。 ⑫文末表現に変化をつける。 |
| (8) 6/23 | 「見えない隣人」（黒井千次）の続き物語を書く（800字程度） | ⑬場面を展開させる。 ⑭視点人物を明確にする。 |
| (9) 6/27 | 書評「お気に入りの本を友だちに勧める」の構想を立てる（ビブリオバトル風に本の魅力を語りあう） | ⑮あらすじを一文に要約する。 ⑯主張を絞り込む。 ⑰アウトラインを作成する。 |
| (10) 6/30 | 続き物語「見えない隣人」の鑑賞会（指定作品および最優秀作にメッセージを書く） | * 「事件の展開」優秀作3編、 「人物・出来事の描写」優秀作3編、 「最優秀作」1編を選ぶ。 |
| (11) 7/14 | 書評「お気に入りの本を友だちに勧める」の記述（800字程度） | ⑱客観的立場から述べる。 ⑲推敲する。 |
| (12) 7/21 | 随筆「私の流儀」の記述（800字程度）（* 森毅「雑木林の小道」の発想及び文章展開法に倣った枠組み作文） | ⑳自分の流儀を擬態語で表現する。 ㉑反論容認型の文章展開法を生かす。 |
| (13) 7/28 | 随筆「私の流儀」の鑑賞会「学びの振り返り」の記述 ポートフォリオの完成 | ㉒自分の作品を他者の目で読み返す。 |

2.5 題材と文体の系統性

上記の授業計画の前半部(1)～(7)は、テキストの構成に沿って作成したものである。

題材については、趣味や嗜好など自分の経験に基づいて書けるものからスタートし、次第に身の回りの風景・人物・出来事に範囲を広げていくという配列となっている。外出自粛が求められたので、情報の収集に多くの時間を割く必要がないものを選んだ。

文体については、(1)感想文・生活文、(2)(3)説明文、(4)(5)(6)描写文(静から動へ)、(7)叙事文と、次第に難易度を上げる展開となっている。

後半部の長文記述演習では、200字作文で身に付けた文章表現技術を生かせるように、描写と叙事を中心とした「物語創作」、説明を中心とした「書評」、感性にしたがって楽しんで書く「随筆」を配置した。

3. 対話型授業にするための指導の手立て

文章表現演習において対話型の授業を実現させるには、構想を練る段階(題材の設定・情報の収集・内容の検討)での意見交換や、推敲や共有の段階での感想や助言の伝え合いに、最大限の配慮をする必要がある。意見交換が書き手への励ましとなるように仕組みなければ、作文に対する忌避感覚を助長させることになってしまう。ましてや、お互いの顔も分からないオンライン授業である。文字言語だけで思いを伝える難しさを克服しなければならない。そこで本授業では、次の手立てを講じることにした。

- (1) 「200字作文」にはタイトルを必ず書かせ、「題」「書き出し」「結び」の三点セットを常に意識させる。(題や見出しの重要性を意識させ、主題を明確化させる。)
- (2) 「200字作文」には、「作品に添えて」(書きたかったこと、工夫した点、迷っている点など)を添付させる。(自分の作品に対する自己評価意識を高める。また、書き手の思いを踏まえたメッセージが書きやすくなり、対話の齟齬を軽減することができる。)
- (3) 作品一覧を作成・配布し、全ての「200字作文」と「作品に添えて」を読めるようにする。(多読してこそ、文章評価意識が高まり、評価規準も明確になる。)
- (4) 批評会では、メッセージを贈る作品を指定する。(自分の作品に、読み手からのメッセージが必ずもらえるようにする。)
- (5) さらに、全作品から「お気に入り」の作品1～2編を選んでメッセージを贈る。(優秀作品には多くのメッセージが届く。これによって、適度な競争意識が働く。)
- (6) メッセージは、観点を明確にして、叙述の具体に即して述べるように注意を促す。(評価規準を意識させる。)
- (7) メッセージ一覧を作成・配布し、各作品に寄せられた「メッセージ」も全員が読めるようにする。(メッセージの書き方からも学び合う。)
- (8) 作品の記述や作品の紹介の際には、ペンネームを用いる。(作家気分を味わうとともに、人間関係による気遣いや気恥ずかしさを軽減することができる。)
- (9) 優秀作を紹介する際には、文章表現技術との関連性を明確にする。
- (10) 毎授業の終結時に「今日のなるほど」を記述して、学びの内容を整理するとともに、今後の課題や抱負を明らかにする。(代表的な感想を次時に紹介して、共有する。)
- (11) 学期末に「私の作品集」(ポートフォリオ)を作成し、学びの成果を振り返る。

4. 授業の実際

4.1 〈第1時〉「オリエンテーション」と「これまでの作文学習を振り返る」

授業開きとして、創作四字熟語80句による教員の自己紹介を行う。また、国語教室のモットーとして「楽しく／仲良く／考える／ひらめきと／論理が大事／ユーモア交えて／機嫌良く」（授業者の名前を句の頭に据えた折句）を示し、さらに、兼好と頓阿の杳冠歌（頓阿『続草庵集』）を紹介して、言葉遊びや言語文化への関心を高めることとした。

第1時の作文課題は、「これまでの作文学習を振り返る」（800字程度）である。求める文章表現技術は、①「文章に題を付ける」、②「いくつかの段落に分けて書く」の2点。WORDで作成し、翌日までにメールの添付ファイルで送るように指示した。

4.2 〈第2時〉「題・書き出し・結びの重要性」及び「自己紹介」（200字作文）の記述

授業の冒頭に、前時の作文課題の「題一覧」を示し、①「読んでみたくなる題」と②「言いたいことが明確に示されている題」を選ばせる。

続いて、「題」と「書き出しの段落」と「結びの段落」だけを抽出した「作品一覧」を示し、次の二つの課題を与えた。③「自分の文章は、題と書き出しと結びが繋がっているか」、④「題、書き出し、結びを手がかりに、他者の作文の内容を想像しよう」

課題①では、「公開」に「後悔」がついてくる」「自由の中の不自由から、不自由の中の自由へ」「作文嫌いが書く作文」という、ひとひねりのある題が高く評価された。

課題②では、「書くことは好きだ。書くことが不得意だ。」「小学生から成長しない作文力」「文章で伝えられないもどかしさ」「恥ずかしさを捨てる」など、要点が端的にまとめられている題が高い支持を得た。

すぐに数値化できる回答結果は、逐次、Googleストリームに提示し、臨場感を持たせる。他者の反応を知りながら、各自で学びの質を高めていくのである。

課題③・④は、〈なか〉の部分抜いて、自分の文章を客観的に見るという試みである。意外性のある課題であり、楽しんで取り組むことができる。その結果、「今まで自分の作文を読み返して分析したり、人の文章を読んで意図を考えたりすることがなかったので、今回の授業での体験は新鮮でした。書き出しと結び、題名が上手く合わるように注意しながら文章を書けるようにしたい」という感想を記すようになった。

こうして、「題と内容とを整合させること」と、「題によって読み手に関心を持ってもらうこと」の重要性を理解させた上で、本時の課題⑤「自己紹介を200字作文で書く」に取り組ませる。テキストに示された作文例（私の楽しみ・小さな自慢）を数編読ませて、ありきたりの自己紹介文にならないように注意を促す。

なお、これ以降は、ペンネームを用いることとした。また、作文提出の際には、「200字作文に添えて」というコメントも書かせることにした。

4.3 〈第3時〉「自己紹介」の相互評価と「勧誘文・推薦文」の記述

第3時では、前時の課題①・②の回答結果（優れた題に共通していること）を紹介するとともに、課題⑤「200字自己紹介」の作品一覧（A4判20頁）を用意した。この「200字自己紹介」1編1編には、授業者の「40字コメント」を書き添えた。相互評価の際のメッセージ・モデルを示すためである。相互評価を学生の自由に任せていると、話題に対する漫然とした感想をありきたりの言葉で述べることになりがちである。書き手の表現意図を受け止めて、内容と表現の両面か

ら叙述の具体に即したメッセージを書くように導かなければ「伝え合い」は実現しない。「作文に添えて」を踏まえ、読み手として見つけた文章の良さを伝えることによって、「書くこと」の楽しさを実感させるのである。そうすれば、他者からの苦言も建設的な提言として生かせるものとなる。

相互評価では、「指定作品」と「お気に入り作品」1～2編に対してメッセージを贈る。こうすれば、誰からも反応がもらえないという状態を避けることができる。また、複数の反応がもらえれば、誰かから最優秀作として選ばれたということになる。

第3時の後半では、テキストに沿って「勧誘文・推薦文を書く」ためのポイントを解説し、昨年度の作文例を紹介した上で、200字作文を書き上げさせる。

授業の終結部では、次時のテーマを予告し、ポイントと題目例を示しながら構想を練っておくように求める。また、「本時の振り返り（学びの整理）」をGoogle Classroomの「質問」に記入させる。この「質問」に書き込んだ内容は、他の受講生もすぐに読むことができる。この即応性は、オンライン授業の長所である。

さて、「自己紹介」で最も高い評価を受けた作品とメッセージ2編を挙げておこう。

猫の鬼退治 ハスター

私は猫を飼っている。黒と白の牛柄で、名は「桃太郎」。私の好きな時代劇から名付けた。まだ一歳にもならない若侍で、よく食べては悪戯をする。うちの桃太郎も浮世の鬼退治が仕事のように、よく害虫を捕まえてくれる。私は自堕落な人間だ。現代の鬼ともいえるかもしれない。鬼というものは退治されるのが世の常だ。うちには桃太郎が一匹。私が退治される日が来るのもそう遠くないかもしれない。日々の生活の見直しを迫られている。(200字)

* 寄せられたメッセージ（11編中の2編）

- ①猫のことを、「若侍」とか「うちの桃太郎」のように、本物の桃太郎のように表現しているのが新鮮だった。猫のことを紹介するだけでなく、自分のことを「鬼」に例え、元気に活動する猫と対比して効果的に紹介しているのも面白かった。「猫の鬼退治」というタイトルに沿っていて良いなと思った。
- ②短い文章なのに、もっとこの人の文を読んでみたくなる作品でした。どんな猫なのか、それに自分はどういう人間なのか、うまい具合に入っている。起承転結がきちんとあり、転と結を200字の中でうまく表現されているのがとても印象的だった。私も起承転結がきちんと入った作品作りを心掛けたいと思った。

初めて書いた200字作文のレベルの高さもさることながら、学生たちのメッセージにも驚かされる。題の魅力、比喩表現の面白さ、猫と自分の対比、起承転結の展開、印象深い結びの一文など、この作品の良さを学生たちが見事に分析しているのである。

書き手自身にとっても、これだけ多くの反応がもらえたというのは驚きの体験だったようだ。学期末に提出させたポートフォリオには、次のように記している。

最初に私は、「作文嫌いが書く作文」と題して文章を書いた。一文が長い、起承転結もでたため、題名が独り歩きしている稚拙な文章である。恥ずかしい限りだ。当時の私は本当に文章を書くことが嫌いで、この授業に対しても苦手意識があった。加えて遅筆である。絶望しかない。しかし、授業で取り組んだのは二百字作文。原稿用紙半分の世界。二百字以上でも以下でもない。二百字「ぴったり」に書く。これが私の性に合ったようだ。知恵を振り絞り、無駄をそぎ落としていく。この作業が楽しくて仕方ない。私は初めて、文章を書いて「好きだ」と思った。作文「嫌い」が「好き」に変わったのは、確かに成長した点といえるだろう。

私の作文体験において大きな転機となったのが、「猫の鬼退治」だ。この作品には非常に多くの方から反応をいただき、大変恐縮している。今でも何かの間違いではないかと思うほど、本当に驚いた。初めての二百字作文で、気負わずにいこうと軽い気持ちで書いた文章だったからだ。起承転結の展開や比喻も、意識して書いたわけではない。無意識に出来るのなら、それに越したことはないと言われるかもしれないが。勿論、意識しないと書けない場合はある。かと言って、技巧に走ると逆に変な文章になってしまう。桃太郎以降、私はこの作品に囚われ、満足のいく作品が書けなかったように思う。変に意識しすぎず、素直な気持ちで書くことが大切だと、私は「猫の鬼退治」から学んだ。

200字作文の効用と相互評価の成果を見事に語っている文章である。この作品は、級友たちにも大きな刺激を与え、次時以降、優秀作がどんどん生まれて来ることとなった。

4.4 〈第4時〉「勧誘文・推薦文」の相互評価と「私の好物を伝える」の記述

前時の振り返り（自己紹介文のポイント）では、「ポジティブになれる言葉選び」「題名の重要性」「簡潔な述べ方」「エピソードの重要性」「意外性のある話」など学生の言葉を引用しながら紹介する。

授業の前半の「勧誘文・推薦文」の相互評価では、「作品番号・題・200字作文・添付コメント」を一覧（A4判12頁）にして提示する。かなりの分量であるが、この学習サイクルに慣れてきたこともあり、集中して一気に読んでいたのであろう、予想以上に早くメッセージが寄せられてくる。

後半では「私の好物を伝える」の記述を行う。最後に、次時の作文課題「風景を言葉だけで描写する」のポイントを簡単に説明し、構想を練るように注意を与えておく。

この日に7編以上のメッセージをもらえたのは、「日記のススメ」「就寝前のご褒美チョコレート」「見惚れる景色」「最後の手紙を書いたのはいつですか」の4編。その中から2編を挙げる。（評は、受講生からのメッセージの要点を授業者がまとめたものである。）

日記のススメ かりんとう

私は5年前から毎日日記をつけている。寝る前に一日を振り返り良いことも悪いことも不安もすべて書くが、必ず最後はポジティブな言葉で締めるようにしている。年を追うごとに考え方や感じ方が変わっているのがわかり、自分では気づきにくい心の成長を感じられて面白い。読み返すと自分の原点に立ち返ることができるのも日記の良さだ。今日の自分と明日の自分は別人という。二度と会えない今日の自分を残してあげてはどうだろうか。

(評)「自分の習慣→日記の良さ→引用→提案」という展開が見事。また、「転」を受けての「結」の文が印象的だ。

見惚れる景色 菖蒲

日本には数多くの寺社仏閣があるが、是非一度は厳島神社に行ってみてほしい。ふと見上げると、朱と白に彩られた天井にかすかにきらめく波の波紋。海にせり出し堂々と立っている大鳥居を近くで見れば、巨大な建造物特有の威圧感と存在感を感じる。透き通った青空、大きく枝を伸ばす木々の深緑、朱色に染まった神社と海に反射して漂う逆さまになった神社。海上に立っているからこそ見られる神秘的な光景を自分の目で直接見てほしい。

(評) 風景描写の手本のような文章。色の観察の細かさ、上から下への目線の移動、色と形の対比など、随所に工夫が見られる。「波の波紋」は言葉が重複している。「天井にかすかに映る波の紋様」ではどうか。

4.5 〈第5時〉「大好物を伝える」の相互評価と「風景を描写する」の記述

学習サイクルも定着してきて、学生からは「オンラインでも相互学習ができていと感じられ、楽しく受講することができた」という感想がたくさん寄せられるようになった。

「私の大好物を伝える」で7編以上のメッセージをもらえたのは、「俺の餃子」「魔性の唐揚げ」「やさしくなったあいつ（梅干し）」の3編。文章表現技術として示していた条件⑤「五感と客観的スケール（具体的な数値）を活用する」、条件⑥「言葉を的確に選ぶ」（動詞を使い分ける。「おいしい」「大好き」などは禁句。斬新な比喻を用いる。味をめぐる周囲の状況を表現する）を生かした作品となっている。

相互メッセージにおいても、この条件に沿って的確な指摘がなされるようになった。

俺の餃子 alu milk

私の不動の大好物、それは何といっても餃子である。みんな大好きあのフォルム。皮にのせる具の量は大胆に、包むときは慎重に。フライパンに並べるときは大事に一つずつ。ごま油のにおいが私の鼻に侵入するともうここは天国？蓋を早く開けてしまいたい。じゅわじゅわ焼かれる音、パチパチ踊る油、餃子たち落ち着いて。という私の胸が一番落ち着かない。いざ、蓋を開ける。匂いは満点、焦げ目也大優勝。ネギをもりもり、よし大成功。

*寄せられたメッセージ（8編中の1編）

作っているときのワクワクがこちらにまで伝わってきた。何より言葉のセンスが素晴らしいと思った。「天国」「大優勝」「大成功」という印象深いワードや、「落ち着いてという私の胸が一番落ち着かない」など、クスッとさせられる文章で、読んでいて非常に楽しかった。餃子はお店で食べる派なのだが、これを読んで、自分でドキドキしながら作るのも楽しそうだった。今度挑戦しようと思う。

魔性の唐揚げ そんなちょう

唐揚げは魔性の食べ物だ。大きな鍋でパチパチと跳ねる鶏肉。狐色の唐揚げを真っ白なお皿の上へ。添えるキャベツの若緑のような彩りも良い。噛むとサクッとした衣に熱々なお肉、肉汁が口の中にジュワッと広がる。表面だけでなく、肉の中まで染み込んだ濃厚なタレ。レモン汁の爽やかな香りが鼻から抜ける。これがたまらない。太りやすいとは分かっているが次から次へと手が伸びてしまう。どうやら唐揚げの魅力に取り憑かれたようだ。

＊寄せられたメッセージ（7編中の1編）

鶏肉を揚げるところから表現し、触感なども擬音を用いて書かれていたのでとても想像しやすかった。また、キャベツの色なども書くことによって、視覚からも想像することができて良いと思いました。

4.6 〈第6時〉「風景を描写する」の相互評価と「人物を描写する」の記述

第6時から待望の対面授業を始めることになった。とはいえ、マスクを着用し、ソーシャル・ディスタンスを守ったままでの授業である。オンライン学習を併用することとした。

相互鑑賞会において自由選択として贈られるメッセージは、最初のころは数編の作品に集中していたが、回を重ねるにつれて分散する傾向が強まってきた。「風景描写」では、10編の作品が4編以上のメッセージをもらうようになった。特定の書き手だけでなく、全員の文章表現力が向上したのである。

特別なショーを見上げる サメ

毎日、静かに行われるファッションショーを見る。真っ暗な中に煌々と輝き、圧倒的な存在感を放つ月。白いレースで彩るように広がる雲。スパンコールが揺れるように小さく光る星の数々。一瞬たりとも同じ装いをしない、お洒落さんな空。天気や時間、季節によって違う表情を見せてくれる。雨の日の淀んだ空にも愛らしさを感じてしまうほど、このショーに心酔している。そして満足したら、明日のショーに想いを馳せて眠りにつくのだ。
(評) やや過剰かなと思われる表現がないわけでもないが、夜空の刻々と変化する姿をこれだけ多彩に表現した語彙力に感服しました。

ステージの上で ゆい

吹奏楽コンクール本番。足音を立てずステージへ入場する。観客席で交錯する様々な思い。他校からの鋭い目、見守る家族や友達の姿、祈る後輩や先生。その先に私たちがいる。楽譜を置いて楽器を温めたり微調整をしたりする。近くにいる仲間と目を合わせ、少し微笑んで頷く。調整を終え、皆の手が止まった。先生が合図し、楽器を構える。雑音が消え、呼吸が止まる。息を呑む。指揮棒が、揺れた。一斉に息を吸う。いざ、戦いが始まる。
(評) 歯切れのよい短文を重ね、演奏直前の緊張感を描き上げました。無音の世界で、聞こえるのは、各楽器の調整の音だけ。この後、どんな曲が流れ出すのでしょうか。静止した風景描写ではなく、動きのある情景描写というべきか。

4.7 〈第7時〉「人物描写」の相互評価と「ある日の出来事」の記述

第7時の「人物描写」では、人物を対比して描いたり、会話を挿入したり、「抱き枕から見た妹」のように対象物の視点から人物を描いたりするなど、表現技法を豊かに使いこなす作品が増えてきた。その中から2編を挙げる。「猫かぶりアレルギー」は12編もののメッセージをもらうことができた。

猫かぶりアレルギー 左右対称

人好きのする顔の弟はその顔の通り非常に外面が良い、らしい。生活態度、授業態度、提出物、成績全て花丸満点。友達も多い、学年の模範生。先生が弟に下した評価だ。私からすれば体中搔きむしりたくなる評価だ。家で彼の彼は昼夜逆転当たり前の自堕落な生活態度、手伝いもせず一日ぐうたら三昧。こんな弟が優等生だ！？と思いながら、傍らを悠々歩く飼猫を「お前の仲間だぞ」と弟に押し付けければ、やけに可愛らしくしゃみをした。

(評)「良い、らしい。」の読点など絶妙。先生が下した評価(外面)と家庭での自堕落な態度(内情)との対比を浮かび上がらせたあと、猫を登場させ、弟さんのくしゃみとの取り合わせで文を締めくくるなど、展開の見事に脱帽しました。

ストイックで乙女なぼく ウジウジきんとき

朝4時に起床。夕食では野菜をもりもり食べる。デザートは無糖ヨーグルトと酒粕は欠かさない。酒もやめ、21時には就寝。父は、この健康的で規則正しい生活を続けたお陰で、40代になってから十数キロのダイエットに成功した。それからというもの、体重の変化で一喜一憂する父の姿は、体型を気にする乙女に見えて仕方がない。数キロの変化なんて誰もわからんよ、そんな家族の声には耳も貸さず、彼は今日もルーティーンをこなす。

(評)まさかお父さんの話だとは意表を突かれました。家族の声の部分は「誰もわからんよ」と会話体にするなど、文体の上でもきめ細やかな使い分けがあり、文末表現の多彩さとともに引きつけられる文章でした。

4.8 〈第8時〉「ある日の出来事」の相互評価と「続き物語」の記述

「ある日の出来事」(叙事文)は200字作文の最後の課題である。ここでは、風景描写や人物描写で学んだ文章表現技術を生かしながら、物事の機能や変化を書いていくことが求められる。『文章作法事典』で学んだ「歴史的現在」の文末表現法を取り入れるなど、生き生きとした描写のできる作品が増えてきた。次に挙げる作品は、13編ものの反応をもらったものである。

催眠列車 ハスター

何気ない日だった。高校生の私は帰りの電車でひとり睡魔に襲われていた。遠距離通学、疲労感、まばらな乗客、薄暗い車内。規則正しい揺れが心地よい。ガタン、ゴトン。一瞬の出来事だった。悪い夢をみていたのかも知れない。負けた。どれほど眠っていたのだろう。「まもなく終点、岩国駅」いわくに？思考停止。再起動。時すでに遅し。一筋の汗が背中をつたう。その日、暗いホームにひとり、青白い顔で立ち尽くす少女がいたらしい。

(評)満点です。読者を引きつける魅力的な題。短文の積み重ね、漢字とひらかなの効果的な使い分け。背中を伝う一筋の冷たい汗の感覚。「いたらしい。」と他人事にしてとほけてみせる絶妙な結び方。みごとな文章力です。

幸福の裏側

サメ

幸福が一瞬で絶望へと塗り替えられた。冷蔵庫に鎮座していた一つのプリン。名前も書いてないし、それなら良いだろうと食べた直後だ。容器の底に、兄の名前が見えた。どうしてそんな場所に？誰がそんな場所気が付くのだ。どうしよう、怒られる。せっかく摂取した糖分を使い切る勢いで罵詈雑言と焦りが脳内を埋め尽くす。兄が気づく前に新しいものを買おう。そう思い立ち上がった瞬間、部屋に響く兄の怒りの声。私の負けが決定した。

(評) 題名と書き出しと結びの照応が見事。どういう事件が起こったのかが次々と解き明かされていく展開も鮮やかだ。短時間のうちに頭の中をくるくるとめぐるっていった様々な思いつきも、心中語としてよく描けている。複数の人物を登場させ、しかもなお、それぞれの人物像がくっきりと浮かび上がらせる筆力に感心した。

5. ま と め

上記の作品例から窺えるように、短作文練習を重ねることで文章表現力が格段に向上し、受講生全員が文章表現を楽しむようになった。

これはただ文章を書き続けたからという単純な理由ではない。文章の書き方を学び、実践し、相互評価し、自分の作品を振り返ることで成長してきたのである。「文体の使い分け」や「類語の活用」という基礎技術にはじまり、「題名と書き出しと終わり」の整合性や「起承転結」によるメリハリのある文章展開まで、学んだことを「読み手に伝わるように効果的に使おう」としたことが大きく作用したものと見なすことができる。

さらに、この授業で得ることができたのは「文章を客観的に見る力」である。

多くの学習者がポートフォリオに次のように書き留めている。一例を挙げる。「自分の作品に対する評価を貰うことで、自分の作品を改めて客観的に見るできるようになった。また、他人の作品へのメッセージを贈る際、自分の好き嫌いという観点で捉えるのではなく、展開の分かりやすさなど技術面も含めて評価することで、授業で学んだことをアウトプットすることができるようになった」(F)

また、次のように記した受講生もいる。「授業を受けた最初は文章を公開することばかりに気を取られ卑屈になっていたが、次第に自分の納得のいく文章を書きたいという気持ちが芽生え、最終的に、自分の文章を自発的に自己分析しながら書けるようになった。他者の眼を気にせず、作文演習に前向きに取り組めるようになり、とても嬉しい。限られた字数、決められたテーマの中で、どれだけ完成度の高い文を書けるか、この勝負は、日記を書くなどして今後も続けていきたい」(M)

これらの振り返りこそ、この授業の最大の成果であると言ってよい。こうした文章評価力の向上は自己学習力に繋がる。これからも「文章を書くことを楽しみたい」という言葉に嘘はないのである。

オンライン授業による文章表現演習の長所は、各自のペースで学習できるという点にある。自分が納得できるところまで考え、文字の巧拙を気にすることなく、記述・推敲を繰り返すことができる。また、学習記録が確実に保存されるので、ポートフォリオにまとめるのも苦にならない。この学習に「互いの文章を読み合える場」を加えていけば、「文章を客観的に見る力」と

「表現しようとする意欲」が高まっていく。オンライン授業における「主体的で対話的な学び」を実現するには、先に述べた11の工夫が欠かせないのである。

問題は、無段落の文章や表記のミスがなかなか減らないことである。印字すれば気がつくはずのことをモニター画面では読み飛ばしてしまうのである。また、書き言葉と話し言葉の混在も注意しなければならない。活字ばかりだと冷たい印象を受けるので、話し言葉を混ぜるのであろう。その混在に鈍感になることにも用心しなければならない。PCやスマホ等を用いた文章表現が抱えるこうした問題については、今後引き続いて検討していきたい。

引用・参考文献

1. 大村はま『大村はま国語教室・第5巻・書くことの計画と指導の方法』筑摩書房、1983
2. 甲斐利恵子「作品のよさを語り合おう」『国語教育相談室・中学校』No69、光村図書、2012
3. 樺島忠夫編『文章作法事典』東京堂出版、1979
4. 金子泰子『大学における文章表現指導』溪水社、2016
5. 金子泰子『国語教師が教える二百字作文練習』溪水社、2018
6. 黒井千次「見えない隣人」『星からの1通話』講談社文庫、1990
7. 澤田英史「論の進め方を学ばせる作文指導―枠組み作文―」『高等学校国語科新しい授業の工夫20選〈第4集〉表現指導編』大修館書店、1998
8. 松谷英明『ひとり学びのプリント50』学事出版、1990
9. 森毅「雑木林の小道―ふらふら―」『ひとりで渡ればあぶなくない』ちくま文庫、1989

[2020. 9. 17 受理]

コントリビューター：町 博光 教授（日本文学科）